

高

図書館報

第57号

愛媛県立西条農業高等学校図書室
令和8年3月1日発行

「本を手にしてみませんか」 教頭 相原 克也

本校では、本年度から、「朝の読書」が復活しました。私は、とてもいい取り組みだと思っています。「朝の読書」の4原則は、①毎日読む。②みんなで読む。③好きな本で読む。④ただ読むだけ。というものです。

高校生の一人当たりの読書量は、平均、月1.7冊程度。一方、不読者が、約半数いるとの統計が出ています。一週間に1冊読めば、月に4冊、年48冊になります。読書は、強制されるものではなくて、趣味の一部としたいものですが、常にカバンに1冊以上入れておき、折を見て読むというのも一方法であるように感じます。

さて、皆さんは図書館に足を運んでいますか。普段、本を読んでいますか。本はいろいろなことを考えさせてくれます。最近、特に、より多くの人々が納得できる考えを、自分の言葉で表現する力が求められるようになりました。つまり、あらゆる場面において、「想像する力」を働かせることが問われてきました。それこそ、読書の必要性ではないでしょうか。

私の読書体験を振り返ると、読み応えのある本として初めて読んだのが『竜馬がゆく』でした。中学生の頃だったと思います。当時、剣道をしていた私は、作者、司馬遼太郎先生の世界に引き込まれ、胸を熱くしました。

本校では、専門高校の特性からか、あらゆる場面で、文章を書くことが多くあります。特に、意見発表では、作られた文章と自分たちが体験した文章は、相手への伝わり方が全く違います。また、プロジェクト発表では、①問題を発見し、課題を設定すること。②課題解決のための計画を立てること。③計画に従って実行すること。④実行の過程や結果をまとめて評価すること。が求められます。理解しにくいものや、しっくりと来ないものは、どれかが欠けているのではないのでしょうか。例えば、視点が明確でないものは、課題設定、計画、実施とまとめがバラバラで、何を言いたいかわからない内容になっているのではないのでしょうか。

私は、たくさんの作品や言葉に元気をもらっています。思わぬところで「パワーワード」を見つけて、それが心の支えとなり、本当に助けられてきました。作品に対する捉え方がみんな違うように、心に残っている言葉とか好きなのところや感じ方が一人一人にそれぞれあると思えるだけで、本って楽しいな、面白いなと思えるのです。

私自身、このところあまり本を読む時間がとれていません。部活動や勉強であまり本を読む時間がないかもしれませんが、読書が苦手な人は、簡単で短いもの、映画化されたものからはじめてみてはどうでしょうか。苦労せずに読み進めていける小説もいいかもしれません。

名作といわれる本、著名な作家の本、話題になっている本をぜひ手に取り、読んでみませんか。そんな本を探しに、西農の図書館へ足を運んでみませんか。

図 書 統 計

シリーズ別累計貸出冊数

薬屋のひとりごと	36 冊
わたしの幸せな結婚	32 冊
この素晴らしい世界に祝福を！	16 冊
ぼくたちと駐在さんの700日戦争	8 冊
後宮の烏	5 冊

単行本 貸し出し冊数

あとはおいしいご飯があれば	8 冊
卒業	7 冊
芥川龍之介は怪奇を好む	6 冊
月とアマリリス	6 冊
イン・ザ・メガチャーチ	5 冊
人魚が逃げた	5 冊
蛍たちの祈り	5 冊

多読生徒

1L	片岡 優樹菜 さん	66 冊
3L	石井 日菜子 さん	65 冊
2L	中川 紗也香 さん	40 冊
3L	渡邊 海綱 さん	37 冊
1L	筒井 陽菜佳 さん	33 冊
2S	塩崎 来夢 さん	25 冊

「日常をひっくり返す「想像力」の魔法 農業科 山本 潤也

『みたてのくみたて 見るだけでひらめくアイデアの本』(田中達也)を読んで

皆さんは、最近いつ「驚き」を感じましたか？勉強や部活動など、日々のルーティンに追われていると、周りの景色がモノクロームの風景のように、当たり前のもので過ぎ去ってしまいがちです。しかし、先日私が足を運んだ愛媛県美術館での体験は、そんな凝り固まった視界を鮮やかに塗り替えてくれるものでした。

そこで開催されていたのは、ミニチュア写真家・見立て作家である田中達也さんの『田中達也 みたてのくみたて』です。会場に足を踏み入れた瞬間、私は言葉を失いました。ブロッコリーが巨大な森の木々になり、積み上げられたノートが都会のビル群に化け、流しそうめんの樋（とい）がウォーターライダーに見えてくる。日常にある何気ない品々が、アイデア一つで全く別の物語を持った世界へと変貌を遂げていたのです。そのあまりの自由さと繊細な構成、そして遊び心に深く感動し、私は展示を見終わる頃には、迷わず一冊の本を手にとっていました。それが、今回皆さんに紹介したい「みたてのくみたて」です。

この本は、一般的な「読ませる本」とは少し趣が異なります。ページをめくれば、そこにあるのは圧倒的な視覚体験です。文字ばかりの本が苦手だという人もいるかもしれませんが、この本は「読む」というより「体験する」という言葉がふさわしいと思います。一見すると、単なる美しいミニチュア写真集のように思えるかもしれませんが、しかし、じっくりと眺めていると、そこにはデザインの極意や、物事を形作るための「思考のフレームワーク」が凝縮されていることに気付かされます。

例えば、何か新しいものを作ろうとしたり、デザインを考えたりするとき、私たちは「無から有を生み出そう」として苦しむことがあります。しかし、田中さんの手法は違います。「既にあるもの」をどう別のものに見立てるか。その角度や光の当て方、配置をどう工夫するか。ミニチュアの世界に惹き込まれるのは、私たちが知っているはずの小さな現実が、作者の類まれなる「見立て」によって再構築され、新しい価値を持って立ち上がってくるからです。これは、美術やデザインを志す人にとって、最高のアイデアソースになるはずです。

高校生活においても、この「視点を変える力」は大きな武器になります。難しい問題にぶつかったとき、人間関係に悩んだとき、あるいは自分の将来に不安を感じたとき。そんなときは、この本を開いてみてください。田中さんの手にかかれば、使い古したホッチキスの針さえも、挑戦すべきハードルへと変わります。一つの正解に縛られず、物事を多角的に捉えることの豊かさを、この本は静かに教えてくれます。この本を読み終わった時には、いつもの図書室や教室が、少しだけ面白そうな場所になっていると感ずることでしょう。そんな体験を、ぜひ皆さんと共有したいと思っています。

『栄光のバックホーム』の裏側

保健体育科 光宗真太郎

『栄光のバックホーム』(中井由梨子)を読んで

私が本書を手にしたのは、あの「奇跡のバックホーム」が心に焼き付いていたからです。映画で見る前にまずは活字で向き合いたい。そう思い読み始めましたが、エピローグのわずか20ページほどで、横田選手の覚悟の重さに胸が締め付けられ、何度も視界が滲みました。

描かれていたのは、華やかなプレーの裏側にある壮絶な現実です。阪神タイガースのドラフト2位で期待されながら宣告された脳腫瘍。医者からは「いったん、野球を忘れましょう」と告げられながらも、横田選手は「グラウンドに帰る」という一点だけを見つめていました。大切なものを突然奪われたとき、これほど前を向けるのでしょうか。ボールが二重に見え、距離感が掴めない。そんな絶望的な状況で、他の能力をプロレベルまで引き上げるために練習を重ねた努力は、信じられないほど凄まじいものです。

こうした背景を知ってから改めて振り返る、2019年9月26日の引退試合。2回表、二死二塁、一打逆転の場面でセンターに飛んだ打球。視力が低下し、ボールが見えない極限の中、横田選手は正確に白球を掴み、ノーバウンドでバックホームを決めました。ランナーをアウトにした瞬間、スタンドは湧き、直後に多くのファンや選手仲間が涙を拭きました。その場にいた全員が、このプレーが偶然ではなく、絶望の中で積み上げた努力の結果だと分かっていたからです。当時の映像が頭に浮

かび、記憶の中のワンシーンと本書の記述が重なったとき、抑えきれない感情が溢れ出しました。
引退後も「誰かの目標になる」と命を削りメッセージを届け続けた彼の姿に、「生きていく」ことへの真剣さを突きつけられた気がします。恵まれた環境で足踏みしていた自分を痛感し、今、やるべきことに真剣に取り組んでいるか、努力を積み上げられているかを改めて考えさせられました。
絶望の中でも挑戦を止めず、絆を紡いだ横田選手の生き様をぜひ多くの人に感じてほしいです。

図書委員会より



ひなこ

図書委員長を務めて 委員長 生活デザイン科3年 石井日菜子

図書委員になって3年、図書委員長一年が経ちました。私は小さい頃の夢が「図書館で働くこと」だったくらい本が好きです。だから、新刊の受け入れ作業やビブリオトーク、図書委員長の所感などの図書委員の業務は、小さなころの夢を思い出すくらい私にとって楽しいものでした。

卒業するのは寂しいけど図書室で先生や先輩方、後輩の子たちと話したことや図書室の雰囲気などを思い出にしていきたいと思います。いつかこれからの西農の図書室に本がたくさん増えて図書室にたくさんの人が来てくれるとうれしいです。

まさき

3年間を振り返って 副委員長 環境工学科3年 伊藤政喜

私が副委員長になり1年が経ち、図書委員としては3年が経ちました。初めてやる事が多く新鮮でした。まず新刊の受け入れや図書室のストーブをつけるために灯油を運搬したりなど肉体労働も少なからずありました。また、ビブリオトークを通してあまり話したことのなかった同級生と話すことができ、とても有意義な時間だったのを覚えています。

図書室の業務（というか仕事）をととても楽しむことができました。今まで楽しく仕事を覚え図書室に行こうと思えたのは、やさしく何をすればいいか教えてくださった菊澤先生や美濃先生、ともに活動してきた先輩や仲間のおかげであると思っています。この3年間の図書室での思い出は私の宝物です。

なつき

図書委員としての活動 副委員長 食農科学科3年 源代夏己

私は2年から図書委員になりました。最初は、マニュアルを見たり、上級生に教えてもらったりしてつたない手つきで貸出や返却のカウンター業務をやっていましたが、慣れてきてスムーズにできるようになった時の嬉しさを鮮明に覚えています。他にも学級文庫を選んで教室に運ぶ作業やハンコを押す作業などもしました。学級文庫を選ぶときは少しでも読んでもらえそうな本を探す時、最もやりがいを感じました。

私にとって図書室は静かで落ち着ける場所であり、色々なことを学びながら楽しめる場所でした。また、みんなのおかげで楽しめて落ち着ける場所であったと思います。2年間ありがとうございました。

さやか

新委員長 2年生活デザイン科 中川 紗也香

私はこの2学期に図書の先生から「図書委員長になってみませんか」と言われました。昨年副委員長やっていたこともあって、新しい挑戦をしてみようと思って決意しました。

委員長となった私のおすすめの本を紹介します。宇佐美りんさん『推し、燃ゆ』です。この本は、芥川賞受賞作であり、本屋大賞にもノミネートされている作品です。現代で推しがいる人には起こりうるかもしれない事を言語化した物語です。これから本を読み始めたいと思っている人にも読みやすい一作です。1年間よろしくお願いします。

この度、副委員長を務めることになりました、塩崎来夢です。

私は1年生の時に図書委員に選ばれました。初めは「本を読むのは好きだけど、委員会は正直面倒だな」と思っていたのですが、毎週当番の日に図書室に行くと先生や先輩方が楽しそうに会話をされていて、私は驚きました。静かに本を読むだけではなく他の学年の先輩方や先生と話すのはとても楽しかったです。

また、図書委員としての仕事も優しく丁寧に教えてもらいました。2年生になり、私は1年の時に引き続き図書委員になりました。仕事にも慣れ、今まで読むことのなかった本を読むことが多くなってきました。不慣れな所もありますが、みなさんが少しでも読書に親しみを持ってもらえるよう頑張っていきます。よろしくお願いします。

新副委員長 生活デザイン科1組 高橋莉里日

りりが

私は、高校に入学してから委員会に何か一つには、入りたいと思っていました。新しい委員会を決める時、経験がある図書委員会に立候補しました。

図書委員会になることができ、常任委員会で副委員長を決める話し合いをした時、先生から「1年の中から1人決めて下さい」と言われました。他の二人と話し合い、副委員長に立候補しました。居心地のいい図書室を作れるように頑張ります。

さて、今年の1冊は、『わたくし96歳 #戦争反対』(森田富美子・森田京子著)**図書室担当 菊澤幸美**

「私は、両親と弟3人を原爆で亡くしました。大切な人たちも亡くしました。私は、家族をこの手で火葬しました。もう誰にも私のような体験をさせたくありません。(中略)私はツイッター(現・X)で戦争反対、核兵器反対を一生懸命に訴え続けています(本文より)」

本書は、96歳のインフルエンサー森田富美子さんと、長女の京子さんが著したものだ。富美子さんは1929年(昭和4年)、長崎市に生まれ、16歳だった1945年(昭和20年)8月9日、長崎で被爆された。その富美子さんが、初めて原爆について語ったのは、2020年、91歳の時。突然のことで、京子さんも大変驚かれたようだ。とある出来事で「戦争への怒り」を爆発させた富美子さんは、「かたりべ」となり、戦争体験の投稿を始めた。投稿は瞬く間に拡散され、フォロワーは増えていった。

2025年5月、私は大分県に住む祖母を亡くした。祖母は、1928年(昭和3年)、長崎市で生まれた。何度か一緒にお盆にお墓参りに行ったから、そのことは知っていた。私にとって長崎は、異国情緒あふれる魅力的な街で、戦争を想起させる場所ではなかった。

大学生の時、祖母が初めて原爆の話をした。その時感じたのは、「反戦」、「核兵器廃絶」「平和の希求」など崇高なものではなく、「申し訳なさ」だった。当時の私は、平和で豊かな日本で、目的もなく生きていた。祖母の苦勞を思うと、それが申し訳なく、心苦しく、祖母の記憶から目を逸らした。離れて暮らしていたこともあり、その後、祖母と戦争の話をする事はなかった。

本書が刊行されたのは、2025年6月。祖母が亡くなった数日後だ。読んでみると、自然と祖母と富美子さんが重なった。文字から迫る戦争の恐怖、苦しみや痛み、そして怒りが、そのまま祖母のもののように感じられた。富美子さんは、被爆体験を75年間封印してきたという。祖母にも「忘れてしまいたい辛い記憶」があったのでは…。あの時、祖母の体験を受け止め、戦争の記憶を受け継ぐべきだった…。ウチの子どもたちに自分たちの命がどう繋がってきたかを伝えたかった…。一人でいろいろ考えてしまい、後悔ばかりが胸に去来した。けれど同時に、富美子さんが、戦争を知らない私たちに、何を託し、願っているのかを知ることでき、それが私の心を前向きにしてくれた。

冒頭は、富美子さんが大病を患い「厳しい処置になる」と、医師に告げられた場面である。反戦を訴えるためにまだまだ生かしてほしい、どんな辛い治療でも、原爆で亡くなった人の苦しみを思えば耐えられる、という富美子さんの熱い思いに胸を打たれ、今年の1冊に選んだ。

編集後記

原稿を寄せてくださった先生方ありがとうございました。昨年からHPにもアップしています。見てね！(菊澤)